

最後の法話であるから皆さんが熱心に聞いて下さる、其の中から突然谷本米一君が

「私は自分を誤魔化していました」と言つて泣き出した。

貴方はよい処へ気が付きましたなア、多くの方が自分の心に誤魔化されて 流転を続けて来た本心を知らないのです。只感情に支配されて、動かない纏りの付かない心を知らないで上塗りをしたり、お化粧をして信じた振りをしていられるので。自分の心が本当に知らされなくて救う本願が本当に判るものですか、親に遇うたも無ければ不実を赦された体験もなく、書物に唯と書いて有るから、其のと仰るからと 空吹く風に流していらるるが多いが、書物に書いて有るのは書いた人の信仰だから、それを知つたのは真似であつて真実ではない、書物に書いて有つても持つては行かれまい。六字に煩惱が融合した一体の境地が有つたかどうか 浄土真宗は其の儘と思えと上から押える宗教でなくて、此の悪性が救われたとは不思議ではないかと下から湧き上がる宗教である。自信の抜けた教人信ばかりの説教だから、自他共に明かながないとるものはない。而し疑謗する人が有れば信順する人も有る、不了仏智の人が有れば明信仏智の人もある、唯と思つてゐる人が有れば唯に成つた人も有る、薄氷を踏む様な信罪福の心を以て往生に向う人が有れば、踊躍歡喜して廣大勝解の者と成つた者も有る。自分に明かなが無いから他人にも無いと言ふのは独断である、盲人が眼開きを嗤うのと同様である、自分に誤魔化されていて知つた振りして同行顔で他人を誤魔化す、報恩の称念が出て来る、疑わずに喜ばれると本心を立派に包んで親様や三世の諸仏を誤魔化してゐるのである。

めて求めてめた最後、疑うて疑うて抜いた後、計らうて計らうてらいつまつた結局、自力で自力で自力でりいた後、ける迄動き、ばたつける迄ばたつくのが 久遠劫からの自力の執心を振り捨て、難中の難を切抜けつつあるのではないか、死んでから地獄で受ける苦惱よりも、立つても坐つてもいられぬ現在の焦熱の苦しみを抜いて欲しいと言ふのが、親鸞聖人様の

吉水禪坊に跪かれた時の心ではないか。後生は一人凌ぎである。親の信心が子の信心に成らないのだから、況して七百年後の私の苦惱の身替りにはならない。而し心の御親に遇うたこそ聖人の信心と私の信心が一体である。心の御親に遇われたか、信の一念で仏智満入し、今こそ明らかになりたるとい世界へ出られたか、如来に信じられた事が信じられたか、本当に唯と言葉までいらぬ唯に成ったか、そこで初めて、あら心得易の安心や、行き易の浄土やのおが生きて来るのである。

62 谷本君へ

大正十三年四月三十日

その後お心の中は如何です、道理や理屈で考えが付きましたか。静かに自分を凝視すればする程、纏まりの付かない、嘘偽りでめた人間であると言う事が自覚されません。こんな心を見抜かれた上の弘願の大法であるのに、私達の小さい了簡から、ああ成れない、こう成れない、何とか成りそうなものと、文句を並べ不平も言つて、実地もがいて見ましたが、机の上の議論で知ったのと、真実歩いて見るのとは苦勞が違います。八方塞がりになって見なければ、今迄聞いたり知ったりした事が全部無効で有った事が判りません。断崖に来た時、初めて迷うたを知るのです。私の意識で全く意識し切れなくなつた時（捨自）初めて絶対の親心に生かされるのであります（帰他）何と力強いではありませんか、広大ではありませんか、私が間に合わない儘が全部仏様の間に合うたとは思議ではありませんか、極悪最下の私に極善最上の法がましますとは南無阿弥陀仏と称えずにはいられません。